

研究区分	教員特別研究推進（地域振興）
------	----------------

研 究 テーマ	開業助産師が考える「待つお産」のとらえ方				
研究組織	代 表 者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	池田 美音
	研究協力者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	太田 尚子
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	大和田 裕美
		所属・職名		氏名	
	発 表 者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	池田 美音

講演題目
開業助産師が考える「待つお産」のとらえ方
研究の目的、成果及び今後の展望
【目的】開業助産師が考える「待つお産」のとらえ方、関連する助産ケアの実践知を明らかにすること。 【研究方法】研究デザインは質的記述的研究である。データ収集期間は2024年10月～2025年3月であり、「待つお産」のとらえ方と助産ケアについて、半構成的面接を行った。データ分析はテーマ分析を用いた。研究協力者の語りを録音した音声データから、逐語録を作成した。また、インタビューの際に観察した内容をフィールドノーツに記録し、逐語録に追加する。逐語録は研究協力者に内容を確認していただき、真実性の確保を得た。逐語録を精読し、助産師による待つお産に対する考え、助産ケアの内容に焦点を当て、意味のある内容ごとに区切り、「待つお産」をどのようにとらえているのか、関連した実践知について着目してサブテーマを抽出した。次に、サブテーマ同士を比較して類似化し、主要テーマを抽出した。データ解釈は研究メンバー間で妥当性を検討した。本学倫理審査委員会の承認を得て実施した。 【結果】研究参加者は8名であった。その結果、【待つことは最大の積極性】であり、積極的にお産を進めるために待っているととらえていた。その前提には《人間が本来持つ機能への信頼から生まれる待つという基本姿勢》が存在し、人間や命への信頼があるからこそ、不必要な医療介入をせずに《リスクマネジメントとして待つ》ことを選択し、《子宮頸管が熟しきり、お産が始まる時を待つ》という行動につなげていた。 積極的に待つためには、《多様な正常をからだの中に染み込ませ、どこまで待てるか判断する》ことが重要であり、妊娠期からの《継続ケアで女性や家族と積み重ねた信頼関係から得た情報を統合する》《妊婦としての成熟や児の成長を慈しみ、みんなで出産を心待ちにできる環境を作り上げる》ことが重要であると考えていた。そして、信頼関係を構築して迎えたお産では、《母児の感覚を邪魔しない助産学に基づいたお産をみる》ことを実践していた。 【考察】【待つことは最大の積極性】と考えており、ここでのいう“積極的”とは、急いで物事を進めることではなく、分娩経過が安全に展開するためのリスクマネジメントとして“待つ”ことを選択していた。そして、その前提には、目の前にいる個人に対する信頼を超えた、人間の機能や命への信頼が存在していた。積極的に待つためには、女性、児の産む力、生まれる力を信じ、見守ることが重要であり、その前提として、助産師として人間の機能への信頼を持ち、命を尊重するという原点に立ち返ることが重要であるといえる。